2024 第10回 これからの建築士賞

審査員からのメッセージ

審査員
青木 淳（AS）
貝島 桃代（アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授）
加藤 耕一（東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授）
西田 司（オンデザイン代表／東京理科大学准教授）

メッセージ

青木 淳

AS

これまで9回、「これからの建築士」のアワードが与えられてきた。見返してみると、さまざまな「これから」があり、また生まれていることがわかる。今回はじめて審査する私も、どんな「これから」に出会えるか、今から楽しみ。とはいうものの、いろいろな方向の可能性がありうるなかで、私がもっとも感銘を受けているのは、初回の受賞者であり、またその後第3回から第4回まで審査員の側にまわられた遠藤幹子さんの「これから」である。彼女には「思い描く社会」があって、その社会実現のために自らが当事者として行動する先に「これから」があった。彼女の思い描く社会とは、専門家に発注して完成品を受け取るのではなく、自分で考え、動き、つくっていく社会のことであり、自らがその礎となろうとした結果として、従来的な「代理人としての建築士」を超えてしまうのだった。そんな「ひとごと」でない活動に、もし出会えることができたらうれしく思います。

貝島 桃代

アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授

21世紀は、20世紀社会がつくりだした問題について振り返り、地球環境をケアする時代と言われています。そこで、建築は単に建物を建てることでは事足りません。建物を建てることが、地域において、社会や環境の持続性に向け、文化を醸成するよりよい実践となること。またそれら実践群を理論づけることで、社会をより良い方向に振り向ける原動力となる思想や哲学を20世紀の社会モデルの見直しとして、政治的に示すことを期待されていると思います。つまり、20世紀に確立された建築士という職業は、21世紀に入り大きく動いている。この賞がみなさんの挑戦を後押しできるよう、真摯に審査に望みます。みなさんの報告、楽しみにしています。

加藤 耕一

東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授

21世紀に入ってすでに四半世紀が過ぎ去りつつあるいま、ふと立ち止まってみると、建築と都市が何を目指していくのか、その方向性、大きな目標を、私たちは見失ってしまっていることに気づかされます。私たちの社会は、20世紀の成功体験を前提条件として、ものごとを考えがちです。しかし、20世紀という極端な上昇気流の時代が過ぎ去りつつあるいま、歴史のなかでこの時代を捉え直してみると、むしろ20世紀こそが異常事態だったのではないかとも思えてきます。
では、これからの建築士に求められる仕事とはどんなものでしょう？ただ単に人口減少・経済縮小の時代に相応しく、小さく活動すれば良いということでもないはずです。現在の社会状況に鋭く切り込んだり、あるいは私たちの日常を大らかに包み込んだりしながら、建築の魅力を豊かに引き出すような活動や作品を、積極的に応募していただけることを楽しみにしています。

西田 司

オンデザイン代表／東京理科大学准教授

昨年審査員を務めてみて、こんなに職能の拡張が起こっているのかと驚いた。建築士の職能のデザインとでも呼ぶ状況は、これまでの建築士の仕事のパッケージには納まりきらないプロジェクトばかりだった。また「これからの建築士」というテーマに対し、年齢も多様で、若い設計者のプロジェクトばかりではなく、何年間も積み上げてきたことで地域と素晴らしい関係を培っている年配の設計者のプロジェクトにも、これからを感じられた。では、今年の審査にはどんなプロジェクトが応募してくるのだろうか？考えるだけで、とても楽しみである。
設計はクライアントや敷地が変わると、与条件のインプットが変わり、結果、出来上がる建築が変わっていく。では、建築士の職能や素養を拡張していくプロジェクトはどんな環境で醸成されているのか、どんなきっかけから始まっているのか、またその職能の拡張や、素養の形成には、何か自身の中に気持ちのスイッチがあったのだろうか？
「これからの建築士賞」の審査は、応募プロジェクトのプレゼンテーションを通して、これまでの建築士が、これからの建築士に醸成される過程を垣間見れる場であり、これまでの建築士の職能が、これからどう変化していくのか＝職能をこれからどうデザインしていくかをオープンに議論する場でもある。